

研究資料

白描西行物語絵巻

宮 次 男

(一)

『西行物語』は絵巻、写本、板本と形態は異なるが、鎌倉時代中期以降、近世にいたるまで、各種の本が流布している。その書誌学的研究も、国文学の分野で進められており、多くの成果があげられている。

その成果により、『西行物語』の諸本を系統的に分類すると、先ず、吉野、熊野地方の遊行遍歴の有無による分類がある。

有 徳川家・萬野家古本西行物語絵巻

白描西行物語絵巻(新出本)

文明十二年筆写宮内庁書陵部本

彰考館蔵写本「西行一生涯草紙」本

永正六年写本神宮文庫本

無 伝阿仏尼筆静嘉堂文庫本

久保惣本西行物語絵巻

正保三年木板本

神宮文庫写本「西行上人発心記」本

このほか、吉野・熊野の遍歴をのべるが、物語の構成が編年でないものに、明応九年の海田采女本西行物語絵巻の系統がある。

次に、巻頭の詞で西行の祖先を「天の児屋根の尊十六代の後胤」にまでたどるものと、たどらないものに大別されるが、その大別は、前記の分類にも共通する。す

なわち、この記述は「有」に分類した白描新出本以下の諸本には見られないのである。

更に、内容的に、法勝寺御八講に鳥羽院が御幸の時、門を警固する六条判官為義の下部に則(憲・範)清の郎等が召捕られるという事件が、西行在俗中にあり、これを収めているのは、西行一生涯草紙と、采女本であるが、白描新出本にも、第一巻第三段にこれが収められている。しかし、他の諸本にはない。

以上は、西行物語諸本のごく表面的で単純な分類であるが、国文学の発言によると、永正六年の古写本は、諸本の中で、最も多くの内容を含むと共に、仏教的な色彩が殊に濃厚であり、本書の系統の本は他にないものである。したがって、現在では (一)文明本系統 (二)正保板本系統 (三)海田采女本系統 (四)永正本系統 に分類することが行われている。

本書で紹介する白描西行物語絵巻四巻は、内容的に、吉野から都に戻った後、伊勢から武蔵、奥州路を廻国して再び都に帰る間の約一巻分が欠けている。しかし、その内容から、文明本系統、特に西行一生涯草紙に近いものではないかと考えられるものである。

注1 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』第五、西行物語(永正写本) 解題参照

2 久保田淳編『西行全集』西行物語解題参照

(二)

白描西行物語絵巻については、『考古画譜』(黒川真頼)全集本上)に、左の記事がある。

〔補〕同 四巻

〔補〕巻二奥書云、以外破損候間、加_二修復_一詔、諸方借用舒_レ卷、無_二故実_一候

所以歟、向後堅可_レ為_二禁制_一矣、明_二成_一五_丙年五月十八日出来了、奉行孝心_{六十}

〔補〕真頼曰、此の絵、伝へて後土御門院勾当内侍の筆なりといふ、白描の絵

なり、方今、青木信實所蔵せり、

この記事によると、白描四巻の絵巻で、明_二成_一五年(一四九六)の修理銘が奥書に書かれているわけである。

次に、『多聞院日記』(三教書)院本)卷三十二の天正十四年(一五八六)三月十日条に、

(別筆)
和州 山野辺之郡

仁興

第四卷奥書

以外破損之間加修復訖諸方借用之時

舒卷無故実之所以歟向後堅可為禁制矣

明応五年丙辰五月十八日出來奉行孝心六十五才

(別筆)
和州 山野辺之郡

仁興

この二つの奥書を、『考古画譜』に引用された奥書と比較すると、一、二字句に相違があるが、まずは同じものとみてよいであろう。また、奥書につづく別筆の「仁興」の署名は、『多聞院日記』の「仁興殿ノ家ニ所持カト見タリ」の記事に合致するものとみて差し支えない。したがって、本絵巻は、この二つの文献に記載された西行絵であることは、ほぼ間違いないわけである。

しかし、『多聞院日記』が三巻と記しているのに、『考古画譜』及び新出本が四巻であるのはいかなることであろうか。この疑問は新出本の体裁から解決できる。

新出本四巻のうち、奥書があるのは第二巻と第四巻である。その間、第二巻と第三巻の間に前記した内容の欠巻が存在することが予測されるのである。次に、第一巻と第三巻の巻初に対して、第二、第四巻の巻初の状態は保存が良好であり、これは、原初にあって、第一、二巻と、第三、四巻がそれぞれ一巻に調巻されていたことを示唆するといえよう。第二、第四巻の巻末に奥書があることも、この可能性を強めるものである。また、現在、欠巻部分は、その量からみて、一卷相当分と考えられるので、原初にあっては、三巻に調巻されており、各巻末に孝心の奥書と仁興の署名が記されていたと推測される。したがって、『多聞院日記』はこれの原初形態を記しているものであり、『考古画譜』は、その後、何らかの理由で、中の一巻が散逸したのち、四巻に改装された状態を記しているか、あるいは、三巻本が六巻本に改装されたのち、中の二巻が散逸して残り四巻になった状態を記しているか、いずれにしても、この巻数に関する問題は解決されるのである。すなわち、両記事の間に矛盾はないのである。また、『考古画譜』の記載は新出本の現状を記している

挿図1 白描西行物語絵巻第二巻奥書

従宝地院、西行絵三
卷スミエ見セ給之、
仁興殿ノ家ニ所持カ
ト見タリ、孝心奥書
在之、鳥羽院ノ御時、
左衛門尉則清ト云殿
上人ト、二五人ヨリ
(オカ)
道心諸国修行、九十
四オニテ往生ト見タ
リ、所々ニテ一円哥
ヲ読ルゝ事迄也、
吉祥院見度由申間遣
了、

挿図2 同右第四巻奥書

と、多聞院にて宝地院から取りよせた墨絵の西行絵三巻を披見したことが記録されており、これには孝心の奥書があり、仁興の家で所持していたことが記されている。

この二つの文献にみる西行絵には、ともに孝心の奥書があったというから、同一本とみなすことも可能である。しかし、琳阿本とか弘願本とか称する絵巻が数種存在することから考えて、同一人の奥書があるからといって、それが同一本とは限らない。また、『考古画譜』で四巻と記録し、『多聞院日記』で三巻と記録としている違いはどう解釈するか。これだけの情報で両者が同一本であると決めるのはいまだ早計といわなければならない。

しかし、新出本の白描西行物語絵巻四巻が現われて、この疑問が解決されるのである。

新出本の第二巻と第四巻には、左の奥書がある(挿図1・2)。

第二巻奥書

以外破損之間加修復訖諸方借用

無故実候所以歟向後堅可為禁制矣

明応五年丙辰五月十八日出來奉行孝心六十五才

ことになるわけである。

次に、新出本の各段について、その内容と絵の主題をのべよう。

(三)

第一卷

(図版VII・VIII参照)

第一段 鳥羽院の時、北面に仕える左衛門尉藤原則清の文武にすぐれた資質、特に和歌にすぐれた才能によって上皇から寵愛されたことをのべ、仏道に志す心境が詠まれる。

絵は、梅、桜が咲く宮廷の殿舎に仕候した則清が、殿上にて公家の前で庭をふりかえり見ながら和歌を詠むところを描く。

第二段 大治二年の頃、鳥羽殿の障子絵を主題に則清が和歌十首を一日で詠み、その賜禄として朝日丸の太刀を頭弁(蔵人頭・左大弁藤原為隆)から賜わり、さらに女院(待賢門院)に召されて権中納言局(藤原定信姉)のはからいで乙女の前から紅の御衣を賜わった。

絵は、障子絵は見えないが、和歌の書き手定信、時信の兩名が廂の間に仕候、その脇で殿上の頭弁から太刀を拝領している則清と、女院にて御衣を拝領する則清が連続描写される。

第三段 法勝寺の御八講に鳥羽院が御幸されて、則清はそれに随行した時、門を警固していた大夫判官為義の下部に則清の郎等がとらえられた。則清は童一人を具して為義にかけあい、とりもどす。

絵は、法勝寺の門前、多くの参詣者の中で、武装した為義の配下に捕われた郎等の返還をせまる則清。門の下では、その報告を為義が受けている。

第四段 則清は親友の佐藤左衛門尉憲保と明朝つれだつて出仕することを約束して別れた。当日の朝、則清が憲保をさそいに寄ると、門で多くの人が立ちさわいであり、内からは泣き悲しむ声がかきこえて、殿は昨夜ねしに死んだという。則清は深く無常を感じ、出家を志した。

絵は、憲保邸の門前に馬をとめる則清と、邸内、若き妻女から事情をきく下部。第五段 則清は親友の突然の死をかなしみ、哀悼の和歌を詠む。

絵は、友を思いながら駒を駆る則清。

第六段 則清は仙洞御所に出仕して出家のお暇を頭弁を通じて願ひ出た。またその心境を詠む。

絵は、御所の一隅で頭弁にお暇を申し出る則清。

第七段 御所から帰宅した則清は、四歳の娘が喜び迎えるのを煩惱の絆を断つべく、縁から蹴落し、ふりむきもせず家に入った。

絵もまたこの光景を描く。

第二卷

(図版VIII・IX参照)

第一段 その夜則清は一夜妻と語りあかし、翌朝、自から髻を切って持仏堂に置き、生年二十五歳の八月十六日、卯刻ばかりに門から出て行った。

絵は、夫婦が臥戸に入って、はらばいに語り明かす情景。

第二段 則清は日頃信心していた聖のもとをたずね、出家を願ひ出た。聖は則清がすでに髻を切っており、止めることができないので、剃髪、授戒する。

絵は、僧に出家を願ひでる則清と、別室で剃髪する光景。

第三段 出家して名も西行となつた。諸行無常の四句偈を観じて柴の庵に居をかまえるのである。

絵は、網代垣を囲らした家で、硯を前に僧と語る西行、これは詞書中にある「さひしさにたえたる人の又もあれな いほりならへん冬の山里」の歌意ともみられる。

第四段 新年を迎えて、西行は西方にむかい、往生極楽を願う。庵の前の梅を行く人が眺めるのを見て和歌を詠み、さらに、隣の庵室の垣根に咲く梅花を詠む。また花見に来た昔の友に心みだれて和歌を詠む。

絵は、隣の庵室か、稚児と僧が囲碁したり稚児に絵巻らしきものを見せる僧がいるなど、のどかな光景が展開する中で、西行が庭に訪れ、一稚児が縁から応対する。

第五段 すでに出家を遂げ懺悔の志を強くした西行は、山林修行に旅立った。まず吉野山に尋ね入り、花を見たいと思つたが、花の代りに雪が枝にかかっていたの

で、道を南へとると、桜が咲きみだれる光景を見ることができた(図版V a)。

絵は、溪流の岸辺に坐して桜を眺める西行、対岸には子供づれの尼が見られる。

第六段 しばらく吉野に留まったのち、熊野の方に向った西行は、途中、やがみの王子に詣で、斎垣のほとりに咲く桜を愛でて和歌を詠む。

絵は、やがみの王子の小祠に参詣する西行、その傍に満開の桜が植わっている。

第七段 西行は登蓮法師のすすめる百首の和歌を詠まずに熊野路に旅立ったのであるが、千里の浜の苦屋に泊った時、夢に三位入道俊成が、西行がその和歌を詠まないことを嘆くを見て、百首の和歌を詠んで送った。

絵は、紀州千里の浜の苦屋と舟着場で二僧立話しするところ。これは西行の見た夢の光景であろう。

第八段 那智に参詣した西行は、滝のもとに常住する僧のすすめで、さらに奥の滝を見に登り、如意輪の滝のほとり、花山法皇の隠棲の跡で、枯れた桜の一枝に花をみつめて、我身にたとえ、哀れをもよおして和歌を詠む。

絵は、花をつけた枯桜のもとで滝を拝む西行と同行僧。

第九段 西行は那智の山から僧南房の僧都を先達として、山伏姿に身を改め、大峯山に入った。深山、おぼが峯、東屋という所で月を詠み、さらに平等院僧正の名が書いてある卒塔婆に紅葉が散りかかるのをみて、和歌を詠む。

絵は、山伏姿に身を改める西行と、山を廻って山伏らにまじり、大峯山を登る西行、山頂には多くの卒塔婆がみられる。

第十段 千草の嶺、蟻の門渡、屏風が嶽、三重の滝、さらに笙の岩屋に至る難路を踏破。

絵は、三重の滝附近の光景で、滝の傍には不動明王と矜羯羅、制吒迦の二童子が岩上に立ち、行者らが滝を拜んでいる。また一行者は岩屋に向って合掌する。

第十一段 西行はこの笙の岩屋で往生を遂げようと思ったが、先達がゆるさないのので、一行と共に山を降り、大和国の近くの人里に出て、鳩の声を心細く聞き、また、まさ木にかかった葛を紅葉と思ひ不思議がった。

絵は、畑の中のまさ木の枝に止った鳩を休息しながら眺める行者たち。

第三卷

(挿図22参照)

第一段 有る人、姿を変えて仁和寺のほとりに隠棲していると聞き、たずねたのち、文を遣わす。

絵は、世捨て人のもとに文を遣すところで、遠く都の堂塔が山越えにみえ、また西行の庵室も山陰にみえる世捨て人の住居。

第二段 西国の方に修行に旅立つことを思いたった西行は、賀茂の社へ暇乞いに参詣をした。

絵は、御幣を奉じた老神主に導かれて、楼門の前でたたく西行。

第三段 待賢門院に仕えた中納言の局は世を捨て、小倉山の麓に隠棲していた。そこをたずねた西行は、この尼と和歌の応酬をする。

絵は、懸桶の引かれた山里の静かな庵で、西行と尼が互に合掌し合って語りう情景。女夫の鹿が風情を添えている。

第四段 天王寺参詣の途中、時雨にあった西行は江口の里で遊女の家に雨やどりを乞うが、断わられてとまどう(図版V b)。

絵は、遊女の里で宿を乞う西行。

第五段 讃岐国に配流された崇徳院をしのんで色々と和歌を詠み、さらに、西行が天王寺から讃岐に行こうとした際、年来の同行の人と別れを惜んで和歌を送った。

絵は、四天王寺の西門の下に坐す西行を示す。境内には参詣風俗が窺われる。

第六段 崇徳院が崩御になったと聞いて涙も止まらなかった。讃岐の松山の津に故院の居られた所を尋ねるが、その跡も見つけることができない。そこで白峯と申す所に御墓をたずねるが、雑草生い茂り、何時人が参ったとも思われない。御陵参拝して哀悼の和歌を献じた西行は、同国の弘法大師出生の地、禅通寺に心をとめて三年逗留。その間住房の傍にある松を愛でて、和歌を詠む。

絵は、松山で一人崇徳院をしのんで思にふける西行、海を隔て、白峯の墓所を礼拝する西行、さらに禅通寺を訪れる西行の三場面。

第四卷

(挿図22参照)。

第一段 都に帰った西行は昔の知人の所で出家後の様々なでき事を聞いたが、中でも娘の消息は哀れであった。出家の後、妻はその日のうちに髪をおろしたが、一兩年、娘と暮したのち、九条民部卿の子の冷泉殿という局にあづけて、高野の天野に籠り、この十六年の間人を近づけないという。この程、冷泉殿の嫡腹の娘が播磨三位と申す人を簪にとったので、西行の娘は上臈女房としてこれに仕えることになったが、明け暮れ神仏に今生にて父の行方を知らせたまへと泣くより外のことなしと知らされた。これを聞いて西行は涙にくれ、いっそ尼にした方が娘のためには良いのではないかと思った。

絵は、知人から娘の消息を聞く西行。

第二段 次の日、西行は冷泉殿の近くの家に行き、その家の主にたのんで娘と合わせてもらった。積る話を物語ったのち、娘に理を尽して菩提の道に入ることをすすめ、娘は出家することを約束して、ひとまず乳母の家に帰った。

絵は、成人した娘と語る西行。

第三段 娘は乳母のもとに行くといつて冷泉殿のもとを去った。冷泉殿は娘が出家剃髪したことを知って大そうなげいたが、娘が出て行く時、自分をみて涙ぐんでいたことをいとしく思うのであった。西行は娘をむかえて、その髪を剃るが、その時、仏道修行について色々と教えるのであった。

絵は、乳母の家での娘の剃髪場面。

第四段 剃髪した娘は、高野山の麓、天野に居る母尼のところへ向った。西行と娘は、必ず三人同じ蓮の身となることを約束して東西に別れる。

絵は、門前で東西に別れる西行と娘尼。屋内には離別に際して西行と娘尼が語っている光景が示されている。

第五段 娘尼は高野の天野の別所になれぬ旅路をたどって、たどりつき、母娘ともに仏道修行にはげんだ。

絵は、紅葉の美しい天野の別所で母娘の尼が合い語る光景。

第六段 その後、西行は大原の奥に籠って和歌を詠んですすす。

絵は、庵室の縁に立って花を見る西行。

第七段 鳥羽院が崩御になってその葬儀の夜、西行は予期せず高野から都に出て

いた。そのため西行は葬儀の行列にお供することができた。

絵は、葬送の牛車を桜の花をかざして見送る西行。

第八段 建久九年二月十五日、双林寺に於いて、かねてねがっていた仏の命日を同じうして往生す(図版VI)。

絵は、満開の桜のものと庵室で、観音、勢至の迎摂を待つて往生を遂げる西行。

第九段 その後、定家はじめ歌人たちは西行を追悼して和歌を詠み、またその葬儀に京中の歌人たちが一品経を書いて追善した。

絵なし。

(四)

新出本の詞書についてのべると、その内容は、先にのべた通り、文明本系統の西行一生涯草紙に近い。しかし、他本とは用語や行文にかなりの相違があり、異本として別に系統立てる方が隠当かと考えられるが、その実証には、諸本との厳密な比較が必要であり、これについては、国文学、書誌学の分野におまかせしなければならぬ。そこで、ここでは本詞書に限り、気の付いた点を指摘するにとどめる。

まず、西行の俗名についてである。本絵詞では、「則清」と書いているが、この「則清」と書くのは永正本と発心記で、他は「のり清」(文明本)、「のりきよ」(伝阿仏尼本)、「憲清」(久保惣本・正保三年木板本)、「範清」(采女本・一生涯草紙)などと記している。

なお、第一巻第三段の法勝寺八講に隨身した段では、はじめに「正清」と誤写し、次に「則清」、さらに「憲清」となって、混乱がみられる。しかし、この段の記述は采女本と殆んど同じであり、同一祖本の存在を予想させるものである。

次に、本絵詞には漢字の一部にふり仮名が施されており、その状態は翻刻に示す通りであるが、片仮名を施したのが、第一巻(但し第二段のみ片仮名)と第二巻、平仮名が第三巻と第四巻で、巻によって異っている。その理由は明らかにしえない。

更に、本絵詞で最も特徴的なのは誤字、当て字の多いことである。次にその主なものをあげる。

まず、全体を通じて行われているのは、眺め、または、詠めという言葉を表わす

の「長目」という漢字を用いていることである(挿図3)。そのほかは、煩惱を「梵納」(第一巻の第一段)、書写の上人とすべきを「諸しやの上人」(二の一、以下この様に略す)、稀代の名歌末代の規模とすべきを「奇の題明詞末代のきは」(二の二)(挿図4)、駒を「小馬」(二の四)、頭弁を「藤弁」(二の六)、輩を「小車」(二の一)(挿図5)、これは「輩」のくずし字を「小」と「車」に分けて書いたと考えられる。三途を「三通」(二の五)、法華経の句、入於深山 思惟仏道を「入猶深山 思惟仏道」(二の六)、俊成を「俊泉」(二の七)、屏風か獄とすべきを「屏風か瀧」(二の十)(挿図6)、常盤を「常葉」(三の一)、勅宣を「勅撰」(三の六)、等活地獄を「冬火獄」(四の三)、双林寺を「草林寺」(四の八)。

以上にみる当て字は、この絵詞の元になったものが、このような字句を使用したとは考えられず、何か早急に書写する必要から、早々のうちに筆写したか、或は、詞書を傍で読ませて、それを聞き書きに筆写したのではなからうか。「屏風か瀧」の誤写には、そのような情況が窺われる。ともかく、早急に書写されたことは、その走り書きの筆跡からも推測されるのである。

挿図3 第一巻第2段 詞「長目」

の走り書きの筆跡からも推測されるのである。こうした制作態度は絵についても、或る程度指適できる。

挿図4 第一巻第2段 詞「奇の題明詞」

第一に、この絵巻が白描であることである。

挿図5 第二巻第1段 詞「小車」

しかも、枕草子絵巻や、豊明絵草紙のような細密画様式でなく、御影堂本一

遍聖絵のような、下描的白描であることは、一種の省略を意味する。

次に各画面の長さは、第一巻の第一段と第三段が最も長く、一八〇厘以上あり、構図的にも十分その内容を描きつくしているが、他の大部分は、三十厘前後から五十厘前後の画面を持つものが多く、構図的にも凝縮ないし省略された場面になっている。このことは、古本西行物語絵巻や、久保惣本、采女本などと比較することによって指摘できる。例えば、第一巻第二段の鳥羽殿の障子絵の歌を詠む場面では、他本がいずれも描いている画中画の障子絵をこの白描本は省略しており、また、熊野、吉野といった名所絵の場面を、古本と比べると、かなり凝縮して、物語の要点のみしか描いていない。このような、いわば絵巻としての見せ所に対して、十分配慮されていないことは、これが省略模本とみなされる所以である。

それでは、本絵巻の原本はどのような画面のものであったか。この問題は、単なる推測の域を脱しないかもしれないが、一応古本西行物語絵巻のような画面が想起される。

古本西行物語絵巻は、西行物語としては、始めの部分がしかも不完全にしか残っていないが、本絵巻の画面と対比すると、次の場面が内容的に一致する。

- (1) 参内して頭弁に出家を申出る場面(一の六)
- (2) 帰宅して娘を縁から蹴おとす場面(一の七)
- (3) 夫婦一つ床に臥し語り明かす場面(二の一)
- (4) 聖の所で剃髪する場面(二の二)
- (5) 新年を迎えた隣家の梅を詠む場面(二の四)
- (6) 吉野山に花を尋ねる場面(二の五)
- (7) やがみの王子で和歌を詠む場面(二の六)
- (8) 千里の浜(二の七)
- (9) 葛城山の下で柁木の葛を見、枯木にとまる山鳩を詠う場面(二の十一)

挿図6 第二巻第10段 詞「屏風か瀧」

頭弁の前に坐して出家を申出る態に示される所が斜めの順勝手構図に描かれている。白描本は、正門

挿図7 徳川本西行物語絵巻第4段

こそないが、中門廊の構図はきわめて近いものがある(挿図7・8)。

(2) 西行が娘を蹴って右手を額に当てる姿、縁から落ちる娘、それに驚き手をさし出す女房、これらの姿勢は全く両者が一致しており、馬まわりの従者たちの姿も似ている。さらに、古本にみる奥の部屋はないが、この建物の斜め構図も相に近いものである(挿図9・10)。

(3) 古本では夫婦の臥す姿が真横から描かれているが、白描本は頭の方から縦に示される。また、古本には髻を切る西行、さらに門から家を出る西行が描かれるが、白描本はこの二場面は省略されている。

(4) 剃髪場面は、ともに剃髪に先だって、別室で二僧と対談する西行の俗体最後の姿を示すが、その家屋の構成が、古本では鉤の手に曲った所にある隣室で対談するのに対し、白描本は別棟で対談する(挿図11・12)。

(5) 古本では、隣家で、稚児に絵巻をみせてそれを絵解きするかの際の僧、次の間で碁を打つ僧と稚児、そしてそれを見物する僧の姿が示され、次に、その庭の梅

挿図8 白描西行物語絵巻第一巻第6段

挿図9 徳川本西行物語絵巻第1段

を垣根越しに庵室から眺める西行の姿が描かれる。白描本では、西行の庵室はないが、隣家での僧と稚児の団欒は全く同じ有様である。しかし、白描本には当家をたずねる西行と、これに対応する稚児が示されている。この隣家の団欒は、詞書では全くふれていない光景で、それが両本殆んど同じ図様で描かれているということ、何らかの関連を推測させる。なお、庭の有様や梅の描写は古本が特に入念であり、これに対し白描本はかなり粗末になっている(挿図13・14)。

(6) 吉野の場面は両者全く異っている。

(7) 古本ではやがみの王子を側面から描くが、白描本は正面から描く。

(8) 千里の浜は、古本は広々とした海岸と松原を描くが、白描本は船泊りの魚村風景となつて、両者趣きを変えている。

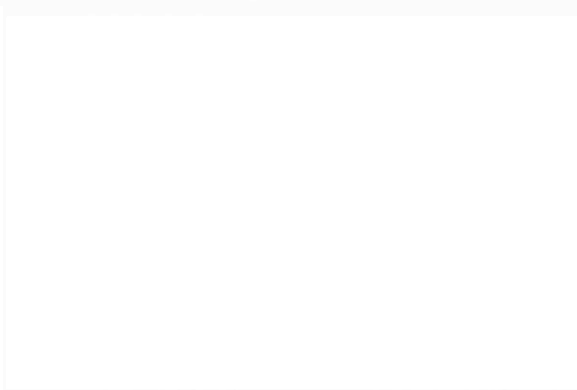
(9) 古本では広々とした野原で、木を見上げて休息する山伏たちを描くが、白描本はその景観がぐっと凝縮している(挿図15・16)。

以上、古本と白描本の同主題の画面を比較した。このうち、両者に共通性のある

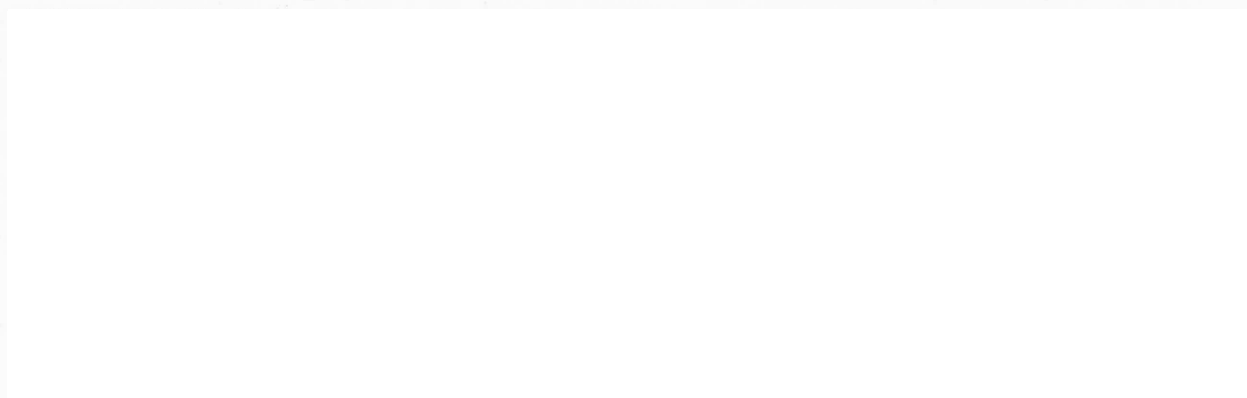
挿図10 白描西行物語絵巻第一巻第7段



挿図12 白描西行物語繪卷第二卷第2段



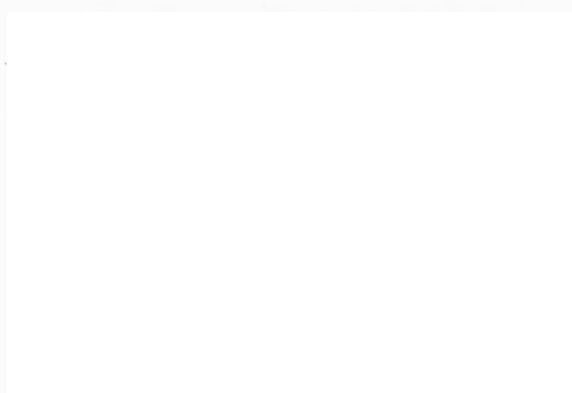
挿図11 徳川本西行物語繪卷第3段



挿図13 萬野本西行物語繪卷第2段



挿図14 白描西行物語繪卷第二卷第4段



挿図16 白描西行物語繪卷第二卷第11段



挿図15 萬野本西行物語繪卷第6段

のは、(1)、(2)、(5)の場面で、他にも、(3)、(4)、(7)、(9)が関連するところがあるように考えられる。恐らく、古本にみるような原本から、この白描本は写されたと考えてよいであろう。では、何時頃に、白描本は製作されたであろうか。

(五)

前に述べたように、この絵巻は、原本の画面をかなり省略、凝縮していることが推定されたが、このことは、この絵巻の作風が原本のそれを踏襲していないことを示唆するといえよう。したがって、ここにみる作風なり、様式から、その制作年代を推定することができるのである。

そこで、白描本制作の下限については、第二、第四巻の修理銘によって、明応五年(一四九六)以前でなければならぬ。では、上限はいつ頃にすべきか。

本絵巻の構図を見ると、対象を近写して画面を構成するものが比較的多い。こうした傾向は、南北朝絵巻によくみられるところである。また、やや遠景を描写した場面、例えば吉野(二の五)、千里の浜(二の七)、大峯山(二

挿図17 白描西行物語絵巻第二巻第7段

挿図19 秋夜長物語絵巻上巻第2段

の九)、松山と白峯(三の六)などの画面では、遠近感がなく、「遠小近大」の表現はあまり行われておらず、場面によっては、吉野、千里の浜など、近くにあるべきものが、却って小さく示されている(挿図17)。このような構図は、他にあまり類がないが、秋夜長物語絵巻には行われている(挿図18)。これは、遠くにあっても中心になる主題や人物にスポットライトを当てて大きく目に表現し、注意をひいているわけで、本絵巻でも、それは同様である。したがって、このような構図法は時代的特徴と考えることができる。

きる。

また、桜花を実際より大きく描くことが行われていて、その花卉も一つ一つはしっかりと描いている。この手法も、秋夜長物語絵巻にみるところである(挿図19)。

次に、建物の形が未だ正しく示されていて、室町絵画によくみられるような極端な逆遠近でなく、その屋台引きも、しっかりと行われている。これらの点は、あまり時代の降らぬことを示唆するが、さらに、人物表現をみると、鎌倉絵巻にみられる細面の古風な面貌でなく、丸顔で童顔を思わせるような、可愛げのある面貌で描かれている。このような人物像は、秋夜長物語絵巻にもみられるが、永徳元年(二三八一)の遠山記念館蔵遊行縁起(挿図20)や、永徳二年の知恩院蔵融通念仏縁起(挿

挿図18 秋夜長物語絵巻上巻第5段

挿図20 遠山本遊行縁起第4段

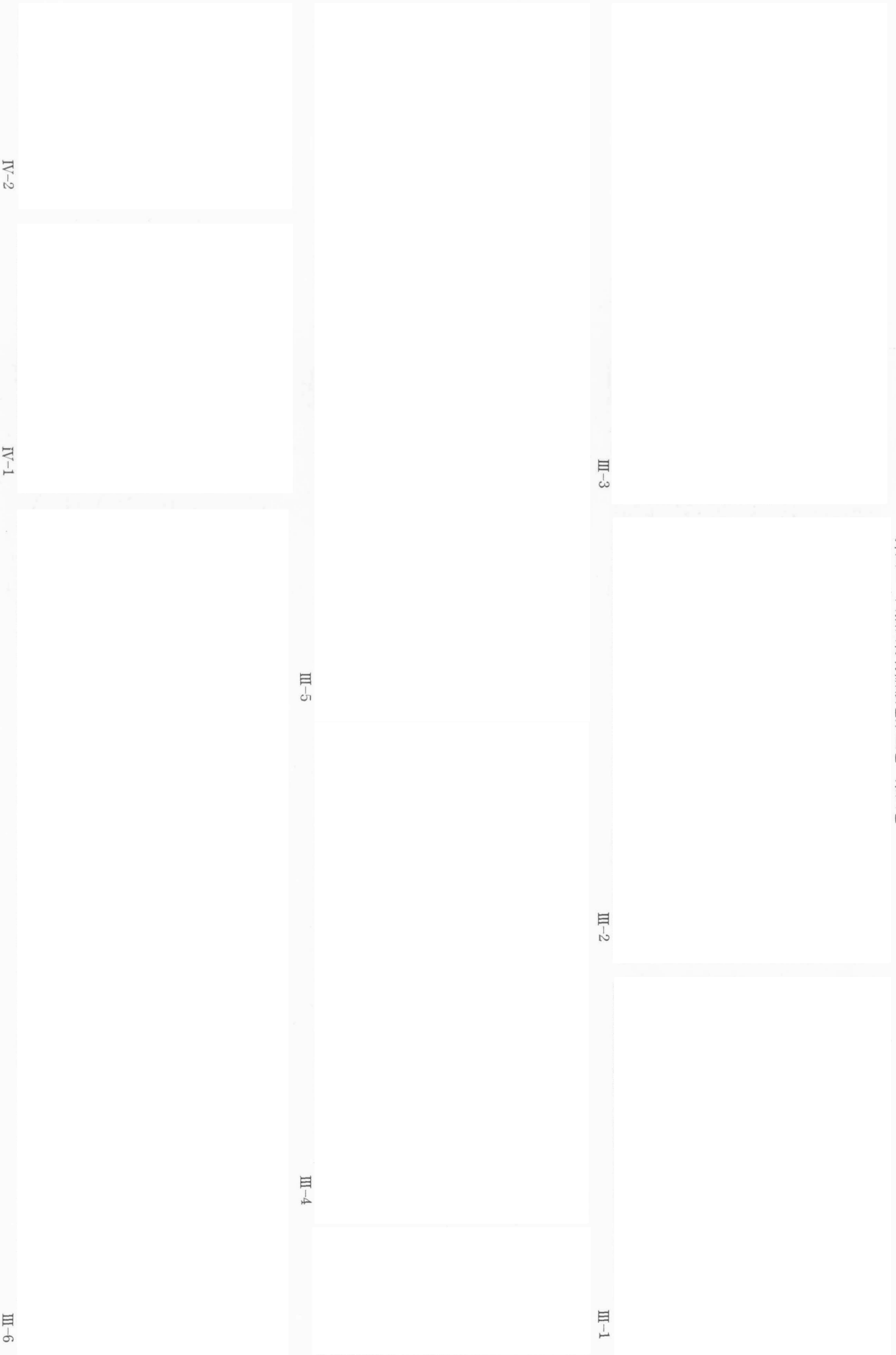
21)の人物表現に通じるところで、時代的特徴として、この表現法は位置づけられるのである。

以上、この絵巻にみる特徴が、時代様式の一端を示すと考えれば、その制作年代も自ずから限定されよう。すなわち、南北朝末期、十四世紀末と推定するのである。そして、この時代の絵巻としては、きわめて上品な画格を備えており、注目すべき作品として価値づけられる。

挿図21 知恩院本融通念仏縁起上巻第1段

従来文献にだけしかその名を見なかった白描西行物語絵巻を紹介した。こうした絵巻の発見は、美術史に携わる者にとっては、誠に冥加なことで、しかも、これが古本西行物語絵巻につぐ古作であることは、ますますその喜びを感じるものである。そのため、一刻も早くこの存在を世に紹介したく、早々のうちに筆を執った次第である。

插图22 白描西行物語絵卷第三卷・第四卷



IV-8

IV-6

IV-4

IV-3

二七

IV-7

IV-5

第一卷

縦 27.8		
横 全長 1172.5		
第1紙	詞	6.1(別紙)
2	〃	26.5
3	〃	20.2
4	〃	37.0
5	〃	37.6
6	〃	37.2
7	絵	37.1
8	〃	37.6
9	〃	37.4
10	〃	37.4
11	〃	37.3
12	詞	37.5
13	〃	37.5
14	〃	37.4
15	詞 絵	37.3
		(絵25.0)
16	絵	37.3
17	〃	35.5
18	絵 詞	37.3
		(詞21.0)
19	詞 絵	37.5
		(絵33.0)
20	絵	37.3
21	〃	37.3
22	〃	37.4
23	〃	37.2
24	詞 絵	37.4
		(絵 4.0)
25	絵	37.3
26	絵 詞	37.4
		(詞20.0)
27	絵 詞	37.5
		(詞 5.5)
28	詞	37.4
29	詞 絵	37.3
		(絵30.0)
30	絵	37.2
31	〃	37.5
32	詞 絵	37.3
		(絵18.0)
33	絵	36.3
(34)	奥付	22.8)

第二卷

縦 27.8		
横 全通 1108.6		
第1紙	詞	35.0
2	〃	37.4
3	詞 絵	37.3
		(絵24.5)
4	絵詞絵	37.3
		(前絵 8.0)
		(後絵11.0)
5	絵 詞	37.5
		(詞 7.5)
6	詞	37.6
7	詞 絵	37.7
		(絵18.0)
8	絵 詞	37.9
		(詞 8.0)
9	詞	37.7
10	詞 絵	37.8
		(絵26.0)
11	絵	25.7
12	詞	32.8
13	〃	32.5
14	〃	37.7
15	詞 絵	37.0
		(絵33.0)
16	絵	19.8
17	詞	37.5
18	詞絵詞	37.4
		(前詞 5.5)
		(後詞13.0)
19	詞 絵	37.5
		(絵25.0)
20	絵 詞	37.7
		(詞26.0)
21	詞 絵	37.3
		(絵 6.0)
22	絵 詞	37.6
		(詞14.0)
23	詞	37.5
24	絵	37.2
25	絵 詞	37.8
		(詞15.0)
26	詞	37.5
27	詞 絵	37.8
		(絵13.0)
28	絵	37.9
29	詞 絵	37.3
		(絵 4.0)
30	絵	36.1
31	奥書	25.8
(32)	奥付	10.0)

第三卷

縦 27.8		
横 全長 749.4		
第1紙	詞	6.5(別紙)
2	〃	23.6
3	〃	38.5
4	絵	38.8
5	詞	39.0
6	〃	38.8
7	絵	38.9
8	絵 詞	38.8
		(詞33.0)
9	詞 絵	39.0
		(絵22.0)
10	絵	31.9
11	詞	25.2
12	詞 絵	39.3
		(絵27.0)
13	絵 詞	38.9
		(詞15.0)
14	詞	39.2
15	詞 絵	39.2
		(絵23.0)
16	絵	39.0
17	絵 詞	39.2
		(詞28.5)
18	詞	39.0
19	詞 絵	38.9
		(絵 9.0)
20	絵	38.9
21	〃	38.8
(22)	奥付	21.0)

第四卷

縦 27.8		
横 全長 1041.9		
第1紙	詞	7.9(別紙)
2	〃	38.8
3	詞 絵	38.6
		(絵15.0)
4	絵 詞	38.8
		(詞27.0)
5	詞	38.8
6	詞 絵	38.7
		(絵32.0)
7	詞	27.4
8	〃	25.2
9	〃	23.3
10	詞 絵	38.8
		(絵14.0)
11	絵	38.7
12	絵 詞	38.8
		(詞20.5)
13	詞 絵	39.2
		(絵10.0)
14	絵 詞	38.8
		(詞 8.0)
15	詞 絵	38.9
		(絵14.0)
16	絵	38.8
17	詞	39.0
18	詞 絵	39.0
		(絵23.5)
19	絵 詞	38.7
		(詞17.5)
20	詞 絵	38.8
		(絵10.5)
21	絵	38.9
22	詞	38.8
23	〃	38.9
24	〃	38.2
25	〃	33.0
26	詞 絵	38.8
		(絵30.0)
27	絵	38.5
28	詞	38.8
29	詞奥書	33.0
(30)	奥付	11.5)

白描西行物語絵巻

詞書（公刊）

（異体、変体の文字は現行のものに改めたが改行は原文通り）

（第一巻）

御鳥羽院の御時北面にめしつかはれける左衛門尉藤原則清と申て弓箭かしく心のたけき事ハ将門保正か外ニハならふ人すくなく数万きの中ニもたゝひとり入らん事を悦大方ニ弓箭を取てハやうゆうか風を伝て空をかける鳥類山野のひつめ心にまかせ詩詔管絃の方にハ業平紀納言のなかれを伝て三公公卿の末座ニめされて日を暮し諸道にちやうせる物は朝家の宝とさため出仕のよそおい郎從眷属牛馬にいたるまでもしき事なく須たつかいきをいかと見えたりかゝるゆへに仙洞にしこうの時ハ勅定のおもきをたかへしと座をあたゝめてうれゑをそへ退出のいとまを給さりしおりにハ床をまもりて夜を明し八四季にしたかいたる御あそひ花の本のせうよう月の前の長目かゝりの下

白描西行物語絵巻

の鞠宮の内の小弓かやうの御あそひに

「ハ

まつめされて其座に名をとゝめしかは君も是日とりたに侍ハと思食ていそ

き検非違使になし給へきよし御氣しきあれともとかくのかれ申て人目に

ハ近習と見ゆれとも心のうちには世のはかなき事を思ひていかなる坂上の正介ハ夢のうちに地獄へ落つかさを

見てけひしにならしとてかふりを給てこの世の望をすてゝ往生極楽を心にかけゝるそと思ひて妻子珍宝

及王位 修命終時不随者 唯戒及施不放逸 今世後世為伴侶と心にかけて

法皇この文のゆえにこそ十せん之位をすてゝきいの国千里の浜におも

むきて那智の御山に行給てつるに仏の道に入らせ給ふそれ梵納の黒雲

あつくして名りの家の犬ハうてとも出やらす因果の白かうくらくして

菩提の山のかせきハマねけとも来すとめるを聞てハうらやみまつしきを

見てハあさけり夢の中のたのしみ浪のうゑの月しつまりかたき心ち

のみしてふいうのむし朝に生して夕死する猶たのみありいつるいきの入

をまたすして命をとち五よくのきつなに引てつるにとめりといへともねう

心やまねハマつしき人とすまつし

けれともねかいもとむる心なけれハ

とめりとす諸しやの上人ハひちをかゝめて枕とすたのしみこの中に

ありなにゝよりてか更ニ浮雲の多いへうをもとめんとするといへり此度必

いとすハ当来もかなしみなり極楽をねかふともからハつゝに西方の淨刹に

往生すたとへは草木の風に須てかたふく方へたをるゝことしかるかゆへ

いやしき我身の何事にさわりて片山影のすまい柴のいほりにこも

りゐさるむと思ひてかく長目けりいつなけきいつ思へき事なれハ

後世しらて人のすくらむなに事にとまる心のありければ

さらにしも又世のいとほしきつねに心をすまして人丸赤人か

なかれを伝て和哥をこのむ事人にすくれたりけれハ君も四季折

節の題を給わらせて哥をめされけれ時をたかえずよみてまいらせける中ニ

立春の哥とて岩間とちし氷もけさハとけそめて

こそそのした水みちもとむなり立帰春をしれとも見をかほに

としをへたつる霞なりけり

鶯のこゑそかすみにもれてくる

人目ともしき春の山里

〔絵一〕 宮中に仕候し和歌を読む

大治二年の比鳥羽殿へ御幸ならせ給てはしめたる御所の御障子の絵の面白

かりけるを御らんして其時哥よみ経信大納言 匡房中納言基俊 俊頼など

めされて我も／＼といとなみよまれける則清をめしてこのゑともの中ニ哥よみて

まいらせよとおほせくたされけれハ其日の内ニよみつらねて申あけゝり哥ニ

いはく初春の雪つもりたる山のふもとに谷河のなかれたる所を見て

ふりつゝもるたかねのみ雪とけにけりきよたき河の水のしらなみ

山里の柴のいほりに聖のこもりたる前に梅の花のさきたる所をかゝれたるヲ

とめこかし梅さかりなる我屋とをうときも人のおりにこそよれ

花のさきみたれたる下にて月をなかむるおとこの有ける所を見て

雲まよふ花のしたにてななむればおほろに月ハ見ゆる成けり

夏のはしめに郭公を尋て山田の原に杉の本にゐて長目たりけるおとこ

二九

をかゝれたりけるに

きかすともこゝをせにせむほとゝきす
やまたのはらのすきのむら立

ほとゝきすのはつね尋るかいありて
聞きつけたる所をかゝれたれハ

時鳥ふかきみねよりいてにけり

外山のすゑにこゑそきこゆる

清水なかれたる柳の影に水むす

ふ女房をかゝれたるを見て

みちのへのし水なかるゝやなき影

しはしとてこそ立とまりつれ

秋のはつ風心ほそくかゝれたる所にて

あはれいかに草葉の露のこほらん

秋かせたちぬみやき野の原

山田守いほりの程に鹿のなきたるを

きゝて

小山田のいほちかくなくしかのねに

おとろかされておとろかさかな

たかき山に白雲のかゝりたるをみて

あきしのや外山のすそや時雨らむ

いこまのたけに雲そかゝれる

小倉山の峯にすくる風にさそ

はれてよにこゝろある所を見て

おくら山ふもとの里に木の葉散は

こすへにはるゝ月を見るかな

勅宣のかれかたきゆへに御障子の

絵の哥十首を一日の中につらねて奏

しければよく御れうけんありて奇

の題明調未代のきほなりとて其時の

手かき定信時信をめされてそかゝせら
れける抑大治二年十月十一日かとよ勅

ろくに朝日丸と申御はかせをあかち
のにしきの袋に入て頭弁のうけ給に

てそ給たりける又女院の御方へめされて

権中納言御局のうけ給にて御はし

たもの乙めの前くれなゐの御そをいた

きてかつけたひければ皆人々

目をとろきてうらやみけるこそ今

生の執心とゝまりてあわれにかたし

けなく悦の涙もたもとにあまり

て覚けり

〔絵2〕

定信、時信伺候、則清頭弁よ
り朝日丸拝領、女院にて紅の
御衣を拝領

法勝寺の御講に御幸ならせ給に

正清御共つかまつりたりけれハいか

なる事かありけん門かためたる六条

の大夫判官為義の下部ニ則清か郎戈男

をとられて少舎童一人を具して大刀はか

はきて子細をきゝて善悪をしらて申う

くるにおしむ程ならばちりはいにならん

するよしを存て向所に六条の判官彼の

男をかへされにけり憲清うけ取て返り

思やうむやくの事なり身をいたつらに

なして悪道に墮て長うかむ事なか

らましと思よりしてこそ発心のはし

めとはなりにけれ

〔絵3〕

法勝寺の門前にて捕われた郎
等の返還をせまる則清

同北面に侍けるあいしたしき佐藤左衛
門尉憲保使の宣旨を給はりて夜部も

鳥羽殿よりうちつれて契やう朝にハ

必ことにきらめきていそきまいる給へ

うちつれ侍へきよし申て七条大宮

にとゝまりぬ其朝まいるさまにさそひ

ければ門に人多立さわきてうちに

さまゝなきかなしむこゑきこへて殿ハ

今夜ねしにゝ死なせ給ぬとて十九に

なる妻女五十有余なる母こゑもおし

ますなきかなしむをきくにいよゝ

かきくらす心ちして風の前のとも

し火蓮華の上の露夢の内の

夢と覚てそこにもとゝりをき

らんとハおもへ共今日計まいりていま

度君に御いとま申てと思ひなして小馬

をはやむれとも袖の涙せきあへす

〔絵4〕

憲保邸の門前に駒をとめる則

抑此人ハふたつの兄にて生年廿七

そかしおくれ先立ためしあれハと

覚てかくそ道々長目ける

朝有紅顔・世路 暮為白骨朽

「詔原

こゑぬれば又もこの世にかへりこぬ

しての山こそかなしかりけれ

世の中を夢と見るゝはかなくも
なをおとろかぬ我こゝろかな

とし月をいかて我身におくりけむ
昨日見し人けふはなき世に

〔絵5〕

馬を駆ける則清

ことにきらめきてまいりたりければ

人々目をおとろかす君もいみしく

思食て作日の哥の御かんとも仰られける

に藤弁をもつて出家の御いとまを申

入たりけれハこととおろき思食て

御ゆるされなかりけれハ竜顔に近付ま

いらせて宣下の御こと葉を耳にふれん

事も只今はかり関白三公を見あけて

御まなしりにかゝらん事も今日計同僚

座列小儀式を定つる北面ハ今日をか

きりなり仙洞の内の御あそひ南

庭の桜池のほとりの落葉月の前の

長目にはつれすめされてありし識も

思ひつゝけて涙もとゝまらす心つよく思

とりて出道にておもふ抑すきぬる二

月に出家ハ一定と思ひてかくそよみける

そらになる心は春のかすみにて

世にあらしとも思ひたつかな

いまたそのこや来さりけん二月も過て

七月のころ又思ひきりて月面白かりしに

かくそよみける

世のうさにひとかたならすうかれ行
こゝろさためよ秋の夜の月

ものおもひてなかむるころの月の色に
いかばかりなるあはれますらむ

おしなへて物ををもへぬ人にさへ
心をつくるあきのはつ風

〔絵6〕 参内して頭弁に出家を告げる

初秋ものかれて又このあきの暮の

出家さわりなくとけさせをわしませと

三宝にきせい申てやとへ行程に年

比たへかたかくいとをしかりし四歳に

なる女子ゑんに出むかいて父のきたり

たるうれしきよと袖に取付たる

をたくいなくいとをしく目も暮て覚け

れとも是こそほんなうのきつなきると

おもひてゑんより下へけをとしたりけ

れはなきかなしみけれともみゝにも

きゝ入すして内ニ入ぬ

〔絵7〕 帰宅した則清子を縁から蹴お
とす

〔第二巻〕

さてもゑんあうのふすまをかさねて男女

のかたらいをなさん事も今夜あはかり

のやとそかしと涙にむせひてあわれに

そ覚ける女房も男にハマさりける人

白描 西行物語 絵巻

にて兼出家の事もさとりてこの

むすめのなきかなしむを見ても

おとろくけしきもなくて我も

おなしさまにとそ思ひ取て侍ける其時

男かくそ思ひつゝけゝる

露のたまきゆれば又もおく物を

たのみもなきハ我身なりけり

十五夜の月中半に成まで涙をなか

し思ひめくらす程に万法ハ心所作なり

心の外に更に別の法なし人界に

生ずる事梵天より糸をくたして

底なる針のあなにつらぬかんよりも

かたし仏教ニあへる事ハ億劫に一度

一眼の亀の浮木の穴に入らんかことし

このたひ出家をとけて仏道に入らん

と思人木石にあらすこのめはおのつから

発心すとかけり麻の中のみもきへため

さるになをる松ニかゝれる藤ハちいろ

の空にのほる梅檀の林に入小車ハ心

もかならず香し切利天の内には歓喜の

色をふくみ蓮華世界の鳥ハ妙法の文

をさへつるされハ名聞けうまんの心

をとめて貧欲慳悋の思をわすれ邪見殺

盗の罪をつくらず飲酒妄語の戒を

たもちて念仏の懺悔をおこたらすつと

めて仏にならんと思程に月も西の山

の葉にかたふけハ只今こそかきりと思ひ

「て

世の中のありさまこしかた行末此世後

世の事ともをさま／＼かたらいけれと

もこの女房はうらみもなげきもひと

すぢならすしてさらに返事する

事なしさてしもとゝまるへきに

あらねハ身つからもとゝりをきりて持

仏堂に置いて生年廿五の八月十六日卯

の時計に門さし出て行ぬ

〔絵1〕 夫婦一つ床に臥して語りあか
す

かくて年比馮たる聖の本へ行たり

けれハとゝむへき事なからすすてに

もとゝりをきらせ給へる上ハちから

なしとてかみをそり戒授けり其時

かくそ思ひつゝけゝる

世をすつる人ハまことにすつるかハ

すてぬ人をそすつるとハ見る

世をいとふ名をたにもさはとゝめ置て

かすならぬ身のおもひてにせむ

〔絵2〕 聖の前で剃髪するところ

出家して西行となつくこの人観念

の窓に心を三明の月にかけ座禪の

床の上になまゆ八字の霜をたると観し

て諸行無常といふは芥心をひらく

はしめ天にのほる橋是生滅法といふは

悪業煩惱の黒所をすてゝ愛欲の海を

渡船なり生滅々己といふハ刀林の劍

の山をこゆる車なり寂滅為楽と

いふは八相成道の証果浄土へ詣道なり

と観して無常の虎のこゑ耳近付共

世路のいとなみにきゝゑす雪山の鳥ハ

日々になけともすみかを出て和すれす

ひつしのあゆみちかつきおやに先

立ならひあり老少不定のさかひなれハ

朝の花ハ夕の風にさそわれ夜の朗

月ハ暁の雲にかくれ誰かとゝまるへき

と観して柴のいほりのすまいあわれ

におほえて

さひしさにたえたる人の又もあれな

いほりならへん冬の山里

身のうさをおもひしらてややみなまし

そむくならひのなき世なりせば

年もすてに暮なんとすさても去年ま

てハとしのくれのいとなみともさま／＼

「に

せし事さすかに思ひいてられて

昔おもふ庭にたき木をつみをきて

見し世にもあらぬ年の暮かな

おのつからいはぬをしたふ人やあると

やすらふ程にとしそ暮ぬる

とし暮しそのいとなみハわすられて

あらぬさまなるいそぎをそする

〔絵3〕 僧を相手に和歌をよむ西行

年立帰祝事には西方にむかいて臨終

三二

正念往生極楽とそおかみける高もいや

しきも世に有人ハみなむ月のはし

めをまちへてハ嘉辰令月の千秋万歳

のたのしみ長生殿のさかへ不老

門の日月悦ひとくる梅鶴龜のよ

はいをあらそひ子日の松のかさり野へ

のわかなてすさみ我もくする事は

さなから春の夜の夢のことししかれハ

つかさ位ののそみさいしちんほうの思ひ

たゝ水のあはまほろしのことしと

観してこの春の内に往生をとけハ

やとそ仏神にもいのり申けるいほ

りの前に梅の花さきたるをすぎ行

人さし入てなかめければ

心せんしつかかきねのむめの花

よしなくすくる人とゝめけり

そはなりけるあむしちのかきねに

さきたりける梅の花風にさそハ

れてなつかしく散きたりけるを見て

ぬしいかに風度とていとふらむ

よそにうれしき梅の匂を

花おもしろしと思ひしみてしつかに行い

たりける所にむかしのとも花見とて

きたりければ心みたれしとて

花見にとむれつゝ人のくる時そ

あたらさくらのとかにハありける

すてに出家をとけて茶の道に入

ぬれはいまハつくりし所の罪生を

懺悔せんと思ひ一念なす所の思みな三

通のこうなり善心ハすくなく悪

心ハ多し罪ハ百丈の石のことくなれ

ともさんけの船にのせぬれは生死

の海を渡て茶の岸にいたるなり

さんけに三の懺悔有但事理のさんけに

かなわざらん物ハ五体を地に付て一心ニ

念仏をとなふれば悪業のたき木は

万里につむといへともけしはかりの

火を付ぬれハしゆゆにやけうせぬ

さいそくの時つくりし罪たとい

万里のたきゝにつもるとも一日の

出家さんけのくとくのけし計の

火をもちて是をやきすてん事

返々もたのもしくこそ侍れ

衆罪如霜露恵日能消除是故応至心懺悔六

この文にまかせていまは山林流ら

うの行をとけんと思ひはしめて出立

けるこそあはれに侍昔ハいさゝか

のありきにも牛馬のうゑをこゝろに

まかせす十人の郎等を前後にした

かへ弓箭のたくい金銀をもちてみ

かきたて四季折節の装束にハれう

らぎんしうをたゝみしにいまは引

かへ麻の衣墨染のかみきぬひかさ計

のいとなみあわれにこそ侍れ年比思ひ

し事なればまつ芳野の山を尋心ニ

まかせ花見むと思ひて行程に同心に

ともなふ人なかりければ

たれか又花をたつねてよしの山

こけふみわくるいわつたうらん

桜の枝にゆきかゝりて花をおとろ

き見れともおそくさきてまたし

かりければ

よしの山さくらの枝に雪ふりて

花をそけなるとしにもあるかな

花ハ南よりひらくといふ事のあれハ

北の方にておそきそと思ひて道をかへ

てたつね入けるに

吉野山こそそのしほりのみちかへて

また見ぬかたの花をたつねむ

尋入たるかい有てさきみたれたる

花の本にて見れハさき散長目の

おもしろけれハこの山にて命のつ

きむまてと思ひ

なかむとて花にもいたくなれぬれハ

ちる別こそかなしかりけれ

よしの山やかていてしと思身を

はなちりなはと人やまつらん

名山の花なれハ面白き事かきり

なくて苔を庭木のねを枕として

袖をかたしきふしてゐたりけれハ

さすかにいきたる命のたよりに

谷の水を結峯の木の葉をかきあつ

めてこゝろすこきすまいに

寂莫無人声 読誦此經典とよみていよ

入猶深山思惟仏道の 行心にあかね共

熊野の方さまにまいらむと思ひ立て

行道にいとあわれのみまさりてかく

そなかめける

おろかなるこゝろの引にまかせても

さてさはいかにつゐのおもひハ

世の中をおもへはなへて散花の

我身をさてもいつてかもせん

さてやかみの王子にとゝまりていかき

のほとりにさきたる花ことにおもし

ろかりければかくそかき付ける

まぢきつるやかみのさくらさきにけり

あらくおろすなみすの山風

「絵6」 やがみの王子の西行

かくてまといありく程にとうれんほん

し人々すゝめて百首の哥をよませけ

る中にすゝめけれともいなみ申て熊

野の方へまいりけれハ紀州千里の

浜あまのたまやにふしたりける夜

の夢に見るやう三位入道俊 泉 卿

引逢て申ていわく昔にかわらぬ

事ハ和哥の道なり是をよまぬ事
をなけくと見ておとろきて百首の
おくととてこの哥をつかハしけり

す糸の世もこのなさけのみかわらぬと
見し夢なくハよそにきかまし

〔絵7〕 海辺の僧一人(その一人西行)

さてなちの御山に参詣の心さし
ふかくてまいりて和光とうちむすいしや

平等にしてりしやうのあまりに八相成
道をおわりにして般若妙法の法施真言
秘密の法 薬 併 臨終正念往生極楽

礼拝を申て日数つもる間千手観音

の滝入道する程に常住の僧申て
いわく是より上に一二のたきをハ

しますおかみ給へと申ければ

悦思てのほりつゝまいりたれハ如意
輪の滝といふ所ハマことにすこし

うちかたむきたるやうになかれたり
いよ／＼たんとく覚て涙もとゝまらず

花山の法皇の御あんせいの跡もあり
其上に年ふりたる桜の枯たるを見

るに是やこのすまんとすれハをの
すから花見る人になりぬへきかなと

よませ給けん所なるらんと覚てかくそ
なかめける

このもとにすみける人を見ざるかな
なちのたかねの花をたつねて

枯たる桜のとしふりたる枝に花

一ふさゝきたりけるを見るに我身の
たぐいとおほえてあわれなりければ

わきて見む老木は花もあはれなり
いまいくたひの春にあふへき

〔絵8〕 山間の滝を拝む西行と同行僧

此山に年久しく行てやかて心あらむ
先立もかな大峯へ入らんと思て待程に

僧南房の僧都其時のせんたつにて申
様入らせ給へ大みねの秘所共おかせ申

さんと申されけれハ喜て山臥装束
出立てそ入にける深山といふ所に付て

月くまなくおもしろかりければ
ふかき山にすみける月を見さりせハ

おもひてもなき我身ならまし

おはかみねといふ所を見渡せハ思ひなし
や月ことにあかく見へければ信野

ならねともなにしほいてか程おもしろ
き月ハてらすとて

おはすてハしなのならねといづくにも
月すむみねのなにそありける

あつまやと申宿にて時雨の後月
面白かりければ

神無月しくればつれはあつまやの

のきにそ月ハむねとすみける
平等院の僧正の名かゝれたるそとハに
紅葉の散かゝりたるを見るに花より

外のとよまれたる人そかしとあわれにて
あはれとて花見しみねになをとめて

もみちそけふは友となりける

〔絵9〕 山伏姿になって行者たちと大峯登山、卒都婆多数山に立つ

ちくさの巔とてことにあはれに思てこへ
けるみねにおのか色あらハす木す糸共
見えければ

わけて行色のみならず木す糸さへ
ちくさのたけにこゝろそみけり

ありのとわたりとてしけりてきり立こ
めて心ほそくあわれに見えければ

篠ふかみきりこすみねを朝たちて
なひきわつらふありのとわたり

このみねの第一の所にこの行者ハ

かへるなりむかし児とをらすして
死にけりことハりとあわれにそ見

へける春の山ふしハ屏風か滝たい
らかにすくる事を思ひやう／＼にいのり

なとする事ことほりなりと覚へて

ひやうふにや心をたてゝおもひけむ
きやうしやハかへりちこハとまれり

三重の滝をおかみける時そ難行苦行
も徳ありて無数の罪障も消閑して
はやく茶の岸を拝見し金伽羅制

多迦の利生方便の御すかたをあらハし
深山の岩屋の辺に坐禅入定の心さし
ふかくしてなみたもとゝまらずそ

おほえける
みにつもること葉の罪もあらハれて

こゝろすみけるみかさねのたき
つほ巔か玉仙のほらを過て生の

岩屋にまいりてをかめはすきぬる百
二十の室々尺迦の巔までの目出もかす

おほえて平等院の僧正の千日こもりの
時草のいほをなに露けしとおもひけん

もらぬいわやも袖はぬれけりともみ給
けん事只今見るやうに覚て

露もらぬいわ屋も袖ハぬれけりと
きかすはいかにあやしからまし

〔絵10〕 不動二童子のいる滝を拝す山伏、岩尾を拝す山伏

この岩屋にて往生をとけはやと思ひ

けれども先達ゆるさゝりけれハ心
ならず出て行程に大和国ま近く

なりて人里わつかにみゑてふる畑
のそハに鳩のこゑおりからにや心

ほそく聞に葛木山を見ゆれば時ま
とはせる紅葉の見えけれハあれハいか

にたつねけれハまさ木のかつらにて
いつもわかぬもみちと申せは

かつら木やまさ木の色ハ秋にゝて
よその木す糸ハみとりなるかな

ふるはたのそはのたつ木にあるハとの

ともよふこゑのすこき夕暮

ゆふされやひはらかみねをこへ行ハ

すこきこゆる山はとのこゑ

〔絵11〕 枯木に止る山鳩をみあげる行
者三人

以外破損之間加修復諸方借用

無故実候所以歟向後堅可為禁制矣

明応五^丙年五月十八日出来了奉行孝

六十五才
「心」

和州 山野辺之郡 仁興

〔第三卷〕

為^{たぬけ}業の朝臣常業にて堂供養

しけるに世をの^かれて山ふかく

すみける人まうてちやうもんせん

とて出立と聞て申つかハしける

いにしへにかわらぬ君かすかたこそ

けふはときハのかたみなるらん

返事

色かへてひとりこのれるときは木ハ

いつをまつとか人のみるらん

有人さまかへて仁和寺の片^{かた}辺^へ

栖^{すむ}と聞てまかりて尋^{たづ}けるにあか

らさまに京^{きやう}へ出ぬときよてむなし

くかへりて其後又人をつかハし

てかくまいりたりしと申ハ返事ニ

たちよりに柴^{しば}のいほりのあわれさを

いかよおもひし冬のやま里

返事

西行

山里にこゝろはかりはありながら

しほのいほりの立帰りにき

又かの世をすて人つかわしけり

をしからぬ身をすてやらて古郷の

なきやみにやまたまよいなん

返事

西行

世をすてぬ心のうちにやみこめて

まとはん事は君ひとりかは

〔絵1〕 仁和寺の辺に住む人に文を送
る西行

かくおこなひありく程に新院和哥

を御このみありて中院の右大臣^{しん}を奉

行にて百首^{しゆ}をめされけり勅^{ちよくちやう}定そ

むきかたきゆへに申上ける百首の中

なにとなくさすかにをしき命かな

ありへは人やおもひしるとて

思ひしる人有明のよなりせば

つきせす身をはうらみさらまし

数ならぬ心のかになしはてゝ

しらせてこそは身をもうらみぬ

面影のわすらるましき別かな

なこりを人の月にとゝめて

うとくなる人をなにとてうらむらん

しられすしらぬおりもありしを

いまそしるおもひいてよと契しハ

わすれんとてのなきけなりけり

あひ馮^{たのみ}たりし人のあつまの方

多^{おほ}くたりけるに申つかハしけり

きみいなは月まつとても長目やらん

あつまのかたの夕暮の空

さて西国の方へ修行せんと思ひ立ける

にそのかみ心指^{さしつかまり}仕ける賀茂の宮ニ

まいりていとま申とて御へいなとま

いらせて帰か事もいかゝとあわれに

覚えて仁安^{にんあん}年神無月十日のこと

なれハ月くまなかりけるに此度^{このたび}ハ

かりとあわれにて

かしこまるしてに涙そかゝりける

またいつかはと思ひあわれに

さる程にその冬遠く修行し侍

けるにはるかなる所より侍従^{しじゆ}大

納言本へおくりけり

あらし吹みねの木の葉にともないて

いつちうかるゝこゝろなるらん

返事

侍従大納言

なにとなくおつる木の葉も吹風ニ

散行かたをしられやハせぬ

〔絵2〕 賀茂社参詣の西行

(待賢) ちけん門院の女房中納言の局世をの

かれて小倉山のふもとにいほりをむ

すひける所へまかりてみれば

まことに事からいふにあわれなり

風の気色^{けしき}さへことにななくして

かけ樋の水心ほそき此人世ニハこ

とからゆふにして世にすくれ人の

こゝろをつくし給しそかしさ^(笈)

されとも引かへて黒かみにつもる

雪眉^{ゆきまゆ}にかゝる霜面^{しもおもて}ニたゝむなみ

あらぬさまに成てこき墨染^{すみぞめ}の形^{かたち}

あわれに覚て

山をろす嵐の音のはけしさお

いつならひけるきみかすみかさ

この歌を見て同院の女房兵衛

の局^{つぼね}かへしける

うき世をはあらしの風にさそはれて

いゑをいてにしすみ家とそみる

小倉山^{こくら}を見わたせば木すゑけハしく

霧にまかいて心ほそく見えければ

雲かゝるとを山畑^{はた}の秋されハ

おもひやるたにかなしかりけり

〔絵3〕 山里の庵で尼僧と語る西行

天王寺へまいりける道にて雨ふり

ければ江口の君か本にやとを

かりけれとも耳にも聞入て

さる人をはか様の所にハ宿をハ

かし申事あるましきみのな

らいには世に有人の我戈に目

かくるをこそとゝめんとすれ但^た一人まといありく入道ニ宿^{やど}ハかさぬと

申けれ

ハことわりと思ひなからかくそ聞へける

世の中をいとふまてこそかたからめ

かりのやとをもをしむきみかな

これを見てさすか心あるきみ

にて人をつかハして返事に

世をいとふ人としきけハかりの宿に

こゝろとむなとおもふはかりそ

〔絵4〕 江口の里で宿を乞う西行

新院あらぬさまにならせ給て

御くしおろし仁和寺にをハし

けるに月くまなかりければあハ

れにおほえて

かゝる世に影もかわらす栖月ハ

見る我さへにうらめしきかな

すてに讃岐国へくたらせ給て後ニハ

世の中に和哥のみちうせぬハか

りけれハ寂念か本へ申けり

ことの葉のなさけたぬぬるおりにしも

あり逢身こそかなしかりけれ

返事 寂然

しきしまやたえぬる道になくくも

きみとのみこそあとを忍はめ

かくて西行天王寺よりまいりてさぬき

方へ下とするを年比の同行あなち

に別をおしみてかなしけれハ

なくさめんためにかく申ける

白描西行物語絵巻

たのめをかん君も心やなくさむと

かへらん事はいつとなけれと

都の外あわれにおほえて

月の色に心をきよくそめましや

みやこをいてぬ我身なりせは

新院讃岐にてハ御心引かへて後世

の御つとめひまなくせさせおハ

しますと聞年比しりたりける

女房の本へかきてつかハしけり

善人不瞋打以何修忍辱といふ文を

かきそへて

世の中をそむく心やなからまし

うきおりふしに君か逢須ハ

〔絵5〕 天王寺参籠の西行

新院かくれさせ給ぬと聞あわれ

さに涙もさらにとゝまらず三四年

計ありてさぬきの松山の津と

いふ所にて古院のをわします所

を尋申けれとも其しるしの

木影も見えずをわしましけれハ

いとゝあわれにて

松山のなみになかれてよる船の

やかてむなしく成にけるかな

まつやまのなみのけしきはかわらしを

かたなくきみハなりましむなり

さる程に白峯と申所に御墓の

侍けるに来て見れば其跡とも

見えずむくらをひしけりていつこそ

人かよいたりとも見えさりけれハ

其かみ御位の時は一天四海をなひ

かして百官にいねうせられ給て関

白大臣いさゝかも勅撰をそむかしと

おそれをなし御こと葉の眼しり

にかゝらんとこそ出仕の人ハせしニ

昔に今は引かへてあさましき草

露の本を栖家とし給仏法の名

字をたに聞ぬ山中ニ捨置奉て

狐狼野干をたより斗の御すみ家

あわれに覚えて

よしやきみ昔の玉のゆかとても

かゝらん後ハなにゝかはせむ

さておなし国ニ禅通寺と申て弘法

大師生給たる所にこゝろとゝまりけ

れはむつましくおほえて大明神の

御宮仕して三年まで行て此所に

はなれかたく覚えてかやうにそなか目け

いまよりはいとほし命あれハこそ

かゝるすまひのあわれをもしれ

栖侍けるいほりのつまに松のあり

けるを見ておもひつゝけられけるハ

松ものいふ物ならはいかハかり契をか

ましとあわれにおほえて

こゝをまた我すみかへてうかれなハ

松ハひとりになりてうからん

すてに曉立出けるにこの松に

かくそちきりてかき付ける

ひさにへて我か後世を問よまつ

あとしのふへき人もなき身に

〔絵6〕 新院の居所を尋ねる西行

院の墓を拜む西行 松下に休

む西行

〔第四巻〕

か様にさまゝ松に契をきて都

の方へ廻 来て昔ゆかり有し人の

本に行てこしかた行末の物

語して袖をしほりける程に抑

いとをしかり給し姫君のあわれ

さよ御出家の後御前は其日の内ニ

さまかへ給て一兩年ひめきミと諸共に

をわしまししか御むすめをは九条

の民部卿ノ子冷涼殿と申人にあつて

置給て母御前ハ高野のあまの

行て此十六七年ハ人をたにかよ

わさす御娘此程冷泉殿のむかへはら

の御子播磨三位と申人をむこに

取給てこの姫君をは上臈女房に

したてまつりていとをしみ給か明暮

ハ行のミして今生にて父の行へ

しらせてたひ給へと鳴より外の

事なしと語ければ西行聞入

ぬさまにハもてなせとも涙ハ色に

三五

見ゆれハさすかに心にかゝりて
思ひやう我世にあるならば女御后に
もなとゝこそ思ひしにさやうのありさ
まこゝろよからぬ事と覚えて夢
の世の中とてもかなえてもなからへ
はつへき事ならねハこしらへて
尼になさはやと思けり

〔絵1〕 西行娘の消息を知人から聞く

次の日冷泉殿近少家に立入てひ
まをうかゝひ有主をいさないこの娘
をしやうしければあやしなから
我父こそ道心をこし給しかと

きけとていてゝ見れハあさまし
けなる藤衣こき墨染きたる
ふる法師なりさてハ我父やと思
にさすかむつましくて出逢物語
しけりいとけなき時にハ引かへて
ゆうにけたかく見ゆ西行娘にいふ
やうさても行多もしらさりに
今日こそ見たてまつれ祖と成子と
なる事先世の契なり我申さん
事きかせ給てんやといへハまことの
おやにてをわしませはいかてか
仰をはそむき申へきといふう
れしく思ひていとけなかりし時より
心斗ハかしつき思ひて院宮へも参
いかにもと思ひしに我かく成ぬる

上ハちからなしそれに付てハやくもそ
れハ御身ゆゑ心みたるゝなりさしも
なき宮仕へよしもなし此世ハ夢
まほろしのことく誰か人間ニのこる
へき老少不定生死無常のさか
いなれハしうらんをとゝむへきに
あらずいかにも菩提の道に入らん
事を心さし給へ我極楽にまい
りてむかへんとありしかはむすめ
申やううれしき事かな本より
さまかゑんと思ひしにとてめのとの
もとへいてんとちきりて返りぬ

〔絵2〕 西行娘と会う

様々其日にもなりぬれはかみな
とあらいて乳母本へいつるとて車寄
て出けるか立帰て冷泉殿をつくく
と見て涙くみて出にけりさて
れんせい殿待かねて人をむかへに
行たれはすてにさまかゑん
とて出給ぬと申せはれんせい殿
なきかなしみ給てこの人の六
の歳よりもけふまでそいて一日片時
もはなるゝ事なかりしにとて
うらみけりたゝし出さまにま
ほりつるこそさすかにあわれにて
さて西行娘をむかへて長成かみ
をゆい分て出家せんとする時申て云

我在世のむかしせいろに地獄の
栖霞をもとめ須巡のほこりを悦て
妻子珍宝の貯に心引てくわたくを
いてすはつゐに悪業の風にさ
それは月の光 暁の雲に隠昨日
見し人今日はなき有為無常の
世いなつまかけろうのことしいつる
いきハ入いきをまたす夢まほろし
の間なりと観し給へし誠の道

におもむき給ハん時ハ観音蓮台をかた
むけ勢至首をなて給て無数の聖衆
化仏百重千重に圍繞せられて
妓楽歌詠して来迎引撰し給ハん
事決定としてうたかいなき事也
と申てつゐに出家をとけて後
山林るらう発心仏道の行を重す
と云とも夫くわくの身なれば
なんちをあいちやくのこゝろはなれ
す故に冬火獄せうの底へ入ら舞と
思に今ハ出家し給を見れば今
生の望足へし人目にハ女人なれ
とも当来には仏子成常に此文
を誦誦し給へし

極重悪人 無作方便
唯称弥陀 得生極楽
若有重業障 无生淨土因
乘弥陀願力 必生安樂国

〔絵3〕 娘の剃髮

さて高野山弘法大師入定の勝
地弥勒しそん下しやうのちくうなり
一度もあゆいひをはこひて此地を
ふむともからハ長三途の苦けんを
離て上品上生に後世を取給へし
此世にて合見事今日斗也只今りん
しうさいこのけうけとおほせと
なくく云ければ尼涙をなかし
我五の年父にハはなれ七歳にてハ
母に離て中あいのやみにまよい人
のめいをたかへしと明し暮して
十二三の歳より身の程思ひしられて
出家のこゝろさしふかく侍きいま

幸に其の思とけ侍ぬれば二世
の望かないて父の恩を蒙事のう
れしさよいまの用文けうけの
御こと葉を浄土の道しるへと馮侍
て必ならず三人同蓮すの身と成
へしと申て東西に別けるこ
そあわれに覚えけれかし

〔絵4〕 西行と娘尼門前で別れる

さてもこの尼ならハぬこゝろに
高野のあま野の別所を尋て行ハ
見る人涙をなかさぬものなかりけり
つゐに母の本へたつね行て共

行けるありさま誠にあわれなり
西行ハよろすこゝろやすくおほえて
身をかくなめて修行に出けり
のかれなくつゝめに行へき道をさは

しらてやいかゝすくへかりける
野に立る枝なき木にもおとりたり
後世しらぬ人のこゝろは

きへにける本のしづくを思にも
誰かはすゑの露の身ならぬ
月を見て心みたれしいにしへの
秋にもさらにめぐりにけり

〔絵5〕 娘高野山に母尼をたずね當る

其後大原のおくに籠て行ける
にかけ樋の水も氷て阿迦水も
春にならてハゑくむましと申
あひければ

わりなしやこほるかけひの水ゆへに
おもひすてゝし春そまたるゝ
さて春に成たりけれとも氷と
けすしていつくをくむへし
とも見ゑざりけれハ

大原はひらのたかねのちかけれハ
雪ふるほどにおもひこそやれ
山路こそ雪の下水とけすとも
右山の外ハ春めきぬらむ

白河の花見と思ひて出立けるに雨
ふりければ花の本に車を立て

長目ける人やさしく覚て申
つかわしけり

ぬるともと花をたつねておもひけむ
人のあとふむけふにもあるかな

郭公の哥ともよみけるにちけん
門院の女房ほりかへの局の本より

この世にてかたらいをかんほとゝきす
しての山路のしるへともなれ

返事 西行

郭公なくゝこそはかたらはめ
してのやまちに君しかゝらハ

〔絵6〕 大原の奥にて寛の水のとくる
を待つ

一院かくれさせ給て後御墓所に
御さうそうありける夜高野より
思はずにまいり合たりけるかそのかみ
左大将実義の大納言にて常に栖
ける所御らんしに御幸ならせ

給御共に侍給けるか其夜の御とも
に又候給けるあわれに覚て
今夜いこそおもひしらるれあさからぬ

きみにちきりのある身なりけり
納奉所を見ればあまりにかな
しくて思ひつゝけゝる

みちかわる御幸かなしきこよいかな
かりの旅と見るにつけても

其後御共に候ける人々なにゝ
たとゑん方なくかなしみながら

かぎりある事なれハみなかへり
けれとも西行一人のこりゐて後
世の御とふらい申さんとて明夜まで
候けるに

とはゝやと思ひながらそなけかまし
むかしなからの我身なりせは、

ほとけには桜の花をたてまつれ
わかちの世を人とふらは

〔絵7〕 牛車の葬列、西行 桜枝をか
ざす

凡閑におんもみれハ生年廿五にて
せんとう北面を出俄に妻子をすて
あさの衣をかまゑて仏前の床に向
てつゝめにやとりをあんやうかいを

ねかい念仏をきにしたかいてすゝめ
後にハ諸国るらうの山林に行をた
てゝ法花涅槃般般若真言平等大会一仏
浄土の思ひをなし慈悲のたもとをし

ほり忍辱の衣を染しかは西の心を忍
五十余過ぬる夢年々歳々花似相
歳々年々人不同一日一夜の内ニ八
億四千の念有懺悔六障根のために

卅一字の大和こと葉を口すさむ東
より出て西へなかるゝ月を見てハ
生死の道しるへと思ひ春の花夏
のせみ冬の薄ものいわすして

生死無常をおしへ万のここの葉ニ
付て心すまぬ時なくして齡傾

傾

八旬にも闍ぬればかうへに雪の山を
いたき漢国の鳥なくひたいには
四海の浪をたゝみて行歩にかなわ
すといへとも草林寺東山ノ辺にいほり

を結て観念の窓の内にハ三明の月
の光を友として睡事なくたり
しやうのみきりの桜花のさかりな
らんを待えてハ釈迦女来御入めつの

日二月十五日の朝に往生をとけんと思ひ
ねかかくハ花の本にて春しなむ
そのきさらきのもち月の比

常にこの哥を長目てつゝめに建久
九年二月十五日ねかいのことく正
念に住して彼の花の本にて

西に向て
若人散乱心乃至以一花供養於画像
漸見無量弘

於此命終即往安樂世界阿弥陀仏大井
衆開遷住所と頌て

ほとけには桜の花をたてまつれ
我か後世を人とふらはゝ
とうち長目て最後には念仏申て空ニ

紫雲たな引いきやう熏して廿五の
井蓮台をかたふけて生年九十四に
て往生とけ言了んぬ西行か妻同廿三の

歳かみおろし高野の尼野といふ所ニ
行めてしたしき人の本より文

つかわしけれども返事する事も

なくて常には無言にて行けり此

むすめの尼を善知識として

兼死するありさま時日を覚えて念

仏高声に申て臨終正念にて同建

久九年神無月十四日九十二歳にて往

生をとけにけり娘の尼ハ父にも母ニ

もおくれぬれはいよ〳〵世の中の

はかなき事をます〳〵観して念

仏おこたらずつとめ其上不

犯成けれハ同臨終修正念に心たゝし

くことからあさやかにて正治二年

九月十三日生年七十四にて往生を

とけにけり三人をなし蓮の身と

なることまことに尊き事いふ

斗なし西行うせにしかは都

の歌よむ人々涙をなかさぬは

なかりけり〳〵

〔絵8〕 西行の往生

其後左近中将定家某院の三位の

中将の本へ西行之事を申ける

もみ月のころはたかハぬ空なれハ

きへけん雲の行多かなしな

返事 さんひら

むらさぎの色をときにそなくさむる

きえけん雲ハかなしけれとも

その比西行かとふらいに京中の

哥人たち上下みな一品経をかきて

そ心指をいたしける其次の年

二月十五日ニ西行か栖ける伊勢

の国の花を見て沙弥寂延行専

か本へ申つかハしけり

なかもけん人そ恋しきさくら花

このきさらきのほととぎくにも

返事 きやうせん

なきあとの春にちきりし二月の

なかはの月もにしへ行かな

以外破損之間加修復詔諸方借用之時

舒卷無故実之所以歟向後堅可為禁制矣

明応五年丙五月十八日出来奉行孝

和州 山野辺之郡 仁興

〔心〕 六十五才

図版要項

一 孔雀明王 部分 (原色版) 東京個人蔵

掛幅装 絹本着色 竪八〇・六 cm 横四二・五 cm

二 同 全図 赤外線写真

三 同 部分 上半身

四 同 部分 a 上半身 X線写真 Softex J 形, 18KV, 5.5mA, 8sec, 80 cm. Softex Film, HS.

b 涌出する雲(右下) X線写真 (同右)

一―四 柳澤孝「異色ある孔雀明王画像」参照

五 白描西行物語絵巻 a 第二巻第5段絵 吉野山 東京個人蔵

b 第三巻第4段絵 江口の里

六 同 第四巻第8段絵 桜花の下の往生

七 同 第一巻第1段―第3段絵

八 同 第一巻第4段―第7段絵

九 同 第二巻第1段・第2段絵

第二巻第3段―第11段絵

巻子装 紙本白描 竪各巻二七・八 cm 全長 第一巻 一一七二・五 cm 第二巻

一一〇八・六 cm 第三巻 七四九・四 cm 第四巻 一〇四一・九 cm

五一九 宮次男「白描西行物語絵巻」参照